百々裏話（21）

おもてあきら

「鏡仙」の昭和32年1月号から34年1月号まで、20回にわたって掲載していただいた百々裏話は、私の都合で長らく中絶していたが、思い立ってまた書かせてもらうことにした。いつまで続けられるか、あまり自信はない。トウトウたる名論は書けそうもなく、ドウドウめぐりの議論は紙数が許さないから、ここしばらくは世阿弥についての解説的なことを書いてみたい。

〔世阿弥伝書の数と書名〕

世阿弥の伝書として現在認められている書物はどれとどれであるか。こんな基本的な問題について、学界には近年まで定説がなかった。また同じ伝書を人によって違う名で呼んでいる場合も多かった。小西甚一博士の『能楽論研究』（昭和36年）と、西尾実博士の、古典文学大系『歌論集・能楽論集』（昭和36年）とが掲げる世阿弥書目が一致して、どうやら定説らしいものが出来たかのようであるが、書名についてはなお一致しない点がある。以下に、私が世阿弥伝書と認める本を年代順に並べ、書名についての見解を述べるが、とりあえず結論だけを並べ、細かな検討は別の機会に書くことにしたい。

1　風姿花伝（フーシカデン）

イ　風姿花伝

ロ　花伝第六花修（…カシュー）

ハ　花伝第七別紙口伝…（ベッシクデン）

世阿弥自身は「花伝」とも略称している。吉田東伍博士が『世阿弥十六部集』（明治42年）に「花伝書」と改めて収めたため、それが通称のように用いられているが、勿論正しい名ではない。ましてや「風姿花伝書」などと呼ぶのは甚だおかしい。第六の「花修」はかってはカシュと呼ばれていたかも知れない。

2　能序破急事。ノーニジョハキューノコトと読むのが正しく、ノーノ…ではない。花鏡の前身である「花習」（カシュー？）ハ現存せずVの中の一条を抜書したものなので、写本には「花習内抜書」と題したものもあるがもとからの題名ではない。抜書である「能序破急事」をそのまま「花習」と呼ぶことも妥当ではあるまい。

3　音曲声出口伝。オンギョクコワダシクデン。実はこの名は、冒頭に位置する一調二機三声の項のみの別題と認められ、書物全体の名ではあるまい。元来は無題の書であろうが、かわるべき書名もないので、従来誤用されている名を踏襲せざるを得ない。

4　至花道。シカドー。中世には至言をシイゲン、至道をシイトーまたはシイドー、至徳をシイトクと発音したから、正しくはシイカドーかも知れない。「至花道書」は吉田博士の私的命名で、正しい名ではない。

5　二曲三体人形図。ニキョクサンタイニンギョーズ。世阿弥自身は「人形」とも略称しているが、これをヒトカタと訓読するのは正しくない。「二曲三体絵図」は吉田博士の私的命名で、正しい書名ではない。

6　三道。サンドー。写本には「能作書」または「能作書条々」と題されており、普通は能作書（ノーサクショ）と呼ばれているが、これは多分「種作書」の誤写であろう。種・作・書の三要素が即ち三道である。世阿弥も相伝を受けた子の元能も、明らかに「三道」を書名として用いているから、それに従うべきであろう。

7　花鏡。カキョー。後世にはハナノカガミと訓読された形跡もあるが、音読する方が古い。吉田博士は首部の欠けた（従って題名

のない）写本を見たため、仮に「覚習条々」と命名したが、勿論「花鏡」が正しい。「花鏡の覚習条々に…」などとおかしな使い方をする学者が近年まで存在した。

8　曲付次第。フシヅケシダイ。フシヅケノシダイと読むべきかも知れないが、確証はない。また厳密に言えば、これが書名かどうかにも若干の疑いはある。「曲付」ないしは「曲付条々」が書名かも知れないから。「曲付書」は吉田博士の私的命名。

9　風曲集。フーキョクシュウ。この書名には異説がない。

10　遊楽習道風見。ユーガクシュドーフーケン。「習道」はシュドーと読むべきで、シュードウではない。「遊楽習道見風書」は吉田博士の私的命名で正しい名ではない。

11　五位。ゴイ。現存する写本には冒頭に「遊楽芸風妙感意見声五位云」とあり、「遊楽芸風五位」を書名とする説もあるが、どうせ略称を用いるなら、申楽談儀に用例の見える「五位」を採りたい。

12　九位。キューイ。江戸時代に観世家ではクイと呼び慣らわしていたようであるが、金春のキューイの方が由緒が正しい。「九位次第」は吉田博士の私的命名。「九位住」を書名とする説もあるが、これは前半部のみの名で、かつ住は「注」の誤写と思われる。

13　六義。リクギ。これは仮称で、原本には書名がない。またこの書を世阿弥伝書と認めない見解もあるが、内容が貧しくとも、世阿弥伝書と認めてよいであろう。

14　拾玉得花。シューギョクトツカ。昭和三十一年に発見された伝書。それ以前に拾玉得花に擬せられていた本（仮称、五音十体）は金春禅竹の伝書と認めるべきであろう。

15　五音。ゴオン。上巻はまだ完本が発見されていない。ゴインではない。

16　五音曲。ゴオンギョク。これが原書名かどうかは疑わしく、元来は無題かも知れない。「五音曲条々」は吉田博士の私的命名。

17　習道書。シュドーショ。シュードーショに非ざることは10の場合と同じである。

18　世子六十以後申楽談儀。ゼシロクジューイゴサルガクダンギ。「申楽談儀」と略称される場合が多い。世阿弥の芸談を子の元能が筆録整理した本であり、厳密には世阿弥の著書とは言えないが、一応は世阿弥伝書と認めてよいであろう。

19　夢跡一紙。ムセキイッシ。長男元雅の死を嘆く追悼文で、能楽論書ではないが、広義の伝書には含めるべきであろう。

20　却来花。キャクライカ。禅林では却来

K
FLORIST TEL 402 2587
花の店

ケイフローリストの人たちは、花を商品としてよりむしろ自分たちと同じひとつの生命としてあつかう。
花はいきものであるという、このあたり前なことを
感じさせてくれる花の店は少ない。
ケイフローリストはそのような店のひとつである。
谷川俊太郎

贈物には電話ひとつで……　青山1丁目・乃木坂間 TEL. 402/2587
ケイフローリスト

をキャライと読むが、謡曲山姥ではキャクライである。それに従っておきたい。コーライカまたはキョーライカと読む説は、「却」を「劫」と勘違いした誤まり。「(世子)七十以後口伝」は吉田博士の私的命名。

21　金島書。キントーショ。「金島集」は吉田博士の私的命名で正しくない。佐渡配流前後の創作小謡集で、能楽論書ではないが、広義の伝書には含めるべきであろう。

以上の二十一種を私は世阿弥伝書と考えている。「音曲五位」「五音十体」「音曲之内六之大事」などを世阿弥伝書と考える人もいるが、それには賛成できない。理由は別の機会に書きたいと思っている。また自筆能本なども広義の伝書ではあろうが、これは除外する方が正しい処置であろう。

なお右の説は、古典文学大系『歌論集能楽論集』の解説の説(実は私が書いた)を、少々訂正したものである。　(38・3・22)

ご進学ご就職の皆様おめでとうございます。いっそうのご活躍を念じ申上げます。そしてこれからも〝能〟があなた方のものでありますように。

≪出演予定≫

4月13日　野村四郎独立披露能(観世会館)
能・安宅勧進帳・滝流之伝(鎮之丞)　能・花筐(ツレ静夫)　仕舞・井筒(寿夫)　この会は鎮仙会にしばしばご出演いただいております野村四郎氏の独立披露の能です。

14日　観世九皐会(矢来)　仕舞・景清(鎮之丞)

20日　橘香会(観世会館)　仕舞・隅田川(静夫)

21日　名古屋観世会能・鉄輪(寿夫)

同　福岡山本観衛会能・山姥白頭・楪杖之伝(鎮之丞)

24日　秀麗会　仕舞・江口クセ(鎮之丞)

27日　雅友会春季大会(観世会館)鵜沢雅師門の素人による素謡仕舞独吟舞囃子能の会。仕舞・志賀(幸徳)昭君(寿夫)隅田川(鎮之丞)歌占キリ(静夫)　鶴亀(雅)

28日　鎮仙会関西支部主催の素謡会。(大阪屋ホール)素謡・咸陽宮・熊野読次之伝(鎮之丞)　恋重荷(鎮之丞・寿夫)

29日　大阪山本真謡会　舞囃子・紅葉狩(寿夫)

5月3日　日京都観世会別会　能世阿望憶(鎮之丞)

5日　大阪能楽会館に於て竹楽会後援による若松宏充独立披露能が催される。仕舞・難波(寿夫)　能・船弁慶前後之替(若松宏充)

同　華楽会　観世静夫師門の素人による素謡仕舞等の会(鎮仙会舞台)　仕舞・遊行柳クセ(鎮之丞)　頼政(静夫)

15日　東京囃子科協議会能・能小袖曽我(寿夫・静夫)　水道橋



